

二本の紹巴奥書本『狭衣物語』と『下紐』の検討

——寛佐奥書本『狭衣物語』にもおよぶ——

中城 さと子

本稿は、狭衣注釈書『下紐』を著した里村紹巴の奥書を持つ大阪天満宮蔵『狭衣物語』および大阪青山短期大学蔵『狭衣物語』の二本を紹介するとともに、二本に存在する異本注記の検討を通じて紹巴が披見した『狭衣物語』諸本の割り出しを試みるとともに、『下紐』の標目との関りおよび『下紐』の引く異本についても検討する。そして、二本と寛佐本『狭衣物語』との関係をも明らかにする。

一 大阪天満宮蔵『狭衣物語』

大阪天満宮に所蔵されている『狭衣物語』のなかに、紹巴の所持本を書写したという奥書を持つ一本がある。まず、書誌から記す。

写本三冊（巻一欠）。袋綴。表紙寸法縦二六・五、横二〇・三センチ。紺地に金泥銀泥の表紙。表紙中央に白地に切箔などを散らす題簽を貼付。題字は墨書であり、残っているもとの部分や字形および奥書から紹巴筆と判断されるが、剥落が甚だしかったからであろう、なぞりがあり、巻数のなぞりに誤りの生じたものがある（巻二は「さころも二」とあるが、巻三に「さころも一」、巻四に「さころも三」とある）。見返しは、金銀の切箔・野毛・砂子を散らす。本文は片面十行、一行は巻二・三が二十一字前後、巻四が二十三字前後。和歌は、改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまま続く。各冊第一丁オの右下に旧蔵者の「延寿王院蔵書」の蔵書印、右上方に現在の所蔵者の「天満菅廟御文庫奉納書籍標印不許売買」の印があり、巻二・巻三の最終丁の左下に「中野桑林堂印」の印、巻四の物語の最終丁の次頁右下のどに「阪府 内本町二丁目 中野啓蔵 製本発兌之記」の印がある。なお巻四には、中野印のある次頁に

此狭衣全部四帖元齋寿三／借予本書写畢外題所望也／次加奥者也

天正廿年桃花之節後

法橋紹巴 花押

の奥書を持つ（／で改行位置を示す。以下同じ）。奥書は、五島美術館蔵『下紐』（西本願寺旧蔵自筆本）と同筆であり、紹巴筆と認められる。この奥書では、該書はもとは四冊あり紹巴所持本の写しであること、書写者は元齋寿三であること、その求めに応じて紹巴が奥書と外題を書いたこと、その時期は天正二十（1592）年三月であることなどを紹巴が記している。そして最終丁表から裏にわたっては、

当于／太閤大相国朝鮮国御征伐之／時張陣於肥之名護屋者之／月也今茲季秋廿五日詣西府之／天満宮
維時幸而有連歌一千／句之雅会不顧愚昧陪席末実為／神助也此狭衣全部四冊在洛陽借／臨江老人秘本
雖謄写之当社一乱以来／作灰燼故別当信寛態求也仍奉／納之而後代留予名於此廟者榮之又榮也

越後木戸元斎

天正二十稔菊月廿五日

寿三 花押

の奥書を持つ。この奥書では、該書は京にあって臨江老人（紹巴）の秘本を借りて書き写したものであること、秀吉の朝鮮征伐に従い名護屋に陣し大宰府天満宮の連歌の会に出た際に戦乱で全てのものを焼失した天満宮の別当信寛^①から該書の奉納を求められたこと、その求めに応じたこと、その時期は天正二十年九月二十五日であることなどを木戸元斎が記している。

「延寿王院蔵書」の印は大宰府天満宮の延寿王院のものであり、天正二十年に木戸元斎寿三が別当信寛の求めに応じ、奥書にあるとおり大宰府天満宮に奉納されたものが該書であることを示している。そして時を経て、大阪天満宮の所蔵に帰したのである。

木戸元斎については、『国書人名辞典』（岩波書店、平7）に解説されているので、そのまま引用させていただく。

歌人〔生没〕生没年未詳。慶長六年（1601）以後かなり高齢で没か。一説、同九年三月七日没。〔名号〕名、寿三。号、元斎・玄斎・休波。〔家系〕木戸忠朝（越後上杉氏の将）の男。東常和・木戸孝範の裔。養子、佐河田昌俊。〔経歴〕下野羽生城主であったが、天正二年（1574）落城、同十年頃、一族は越後に移る。上杉景勝に仕え、鶴岡（大宝寺）城主・藤島城主に任ぜられる。豊臣秀吉の朝鮮出兵に際し文禄三年（1594）渡鮮した。飛鳥井雅庸に学んで和歌・連歌を能くし、執政直江兼統と共に中央の歌会に名を連ねている。同座に紹巴・昌叱・由己ら。時宗三十三世他阿上人と交流があったらしい。沙弥をも称した。

〔著作〕歌会作法聞書（天正一九）師説撰哥和歌集（文禄三）

紹巴と、その周辺にいた歌人木戸元斎両名の奥書からは、大阪天満宮蔵本（以下適宜、「元斎本」「斎」と称する）の親本（以下、親本をも「元斎本」と称することがある。同様に掲出本の名称でその親本やつながりのある本を表す場合がある）が紹巴所持本であることが明らかである。よって元斎本は、紹巴の『狭衣物語』の研究を解明する手掛かりを与えてくれる本である。

二 大阪青山短期大学蔵『狭衣物語』

大阪青山短期大学蔵『狭衣物語』のなかに、紹巴の所持本を書写したという奥書を持つ一本がある^②。この本は、『大阪青山短期大学所蔵品図録 第一輯』（平4）に紹介されているので、参照させて頂き、書誌から記す。

写本全四冊。列帖装。表紙寸法縦二四・二、横一六・八センチ。黒地に金泥銀泥の表紙は、巻一に春、巻二に夏、巻三に秋、巻四に冬の草木などを描く。表紙中央に朱地に金泥砂子にて雲霞を描く題簽を貼付。題字は墨書で、「狭衣一（二・三・四）」見返しは金箔押し。本文は片面九行。和歌は、改行二字下げ二行分かち書き、地の文がそのまゝ続く。各冊第一丁オの右下に「安田文庫」、物語の末尾に「月明荘」の印、最終丁の左下に「拝土蔵書」の印がある。

なお各冊末尾に紹巴の奥書がある。巻一から巻四の奥書は順次示すと、次のとおりである。

此狭衣全部者以予本毛利大藏大輔殿／元康御書畢一覽之次加奥書者也

慶長四年臘中旬／紹巴 花押

此狭衣全部以予本大藏大輔殿^{元康}／御書畢一覽之次加奥書者也

慶長四年臘中旬／紹巴 花押

此狭衣者以予本毛利大藏大輔殿／元康御書者也次一覽之次／加奥書而已

慶長四年十二月中旬／紹巴 花押

此狭衣全部者以予本元康^{毛利大藏大輔殿}／御書畢一覽之次誌之者也

慶長四年臘下旬／紹巴 花押

これらの紹巴の奥書では、該書は紹巴の本を借りて毛利元康が書き写したものであること、その時期は慶長四(1599)年十二月であることなどを記している。各冊に奥書があること、それぞれの奥書の文面は似ているが同文ではないこと、第四冊旬日が他と異なっていることなどからは、元康は一冊づつ借り出し書写し奥書を書いてもらったものと推測される⁽³⁾。元康は毛利元就の八男の武将であり、連歌を通じての親交(『国書人名辞典』による。ただし七男説あり)により紹巴の『狭衣物語』研究を知り、既に同年六月に『下紐』を書写したが⁽⁴⁾、『狭衣物語』の書写にまで及んだものであろう。

紹巴の奥書からはこの本も親本が紹巴所持本であることが明らかで、上野英子氏が指摘されるように『下紐』の依拠本文である(ただし巻一の依拠本文は元斎本の親本であろう。これについては巻一の検討で明らかにする。大阪青

山短期大学蔵本〔以下適宜、「元康本狭衣」「元康本」「康」と称する〕の親本が『下紐』巻二から巻四の依拠本文であることは、『下紐』の標目と元康本狭衣との一致度が、同じく紹巴奥書本である元斎本との一致度に巻二・三ではやや勝り、巻四では拮抗していることなどから判断される。よって、元康本狭衣も『下紐』の研究に欠かせない重要な本である。

三 元斎本と元康本および『下紐』

まず二本から拾い出せた異本注記の数を次表に示す。

△表1▽

	元 斎 本	元 康 本	簡 所 の 計
巻一	／	一	一
巻二	一二	一九	二八
巻三	六	三九	三九
巻四	一〇	一三	一三
計	二八	七二	八一

元斎本は巻一がないので二本の異本注記を比較できるのは巻二以降であるが、一見するに、巻三・四では元康本の異本注記の箇所の中に元斎本の異本注記も含まれていて、検討するのが比較的容易そうである。ただし巻四は校本がないので、便宜上、巻三の検討から始めたく思う。

1 卷三の検討

まず論述の都合上、元康本の三九個所の本文とそれに対応する元齋本の本文を、元齋本、元康本の順に次表に示す。

△表2▽

	元 齋 本	元 康 本
1	ありなしの玉のゆくゑにまとはさて夢にも (5オ)	ありなしのたまのゆくゑにまとはさて夢にも (5ウ) <small>しイ</small>
2	つねのことそかしされと夕はへにや (9オ)	つねのことそかしゆふはへにや (10ウ) <small>されとイ</small>
3	あられのいとおろくしう (9ウ)	あられのいとおろくしう (10ウ) <small>めイ</small>
4	きらくとして (9ウ)	きらくとして (11オ) <small>きらくとい</small>
5	なとをいとめやすき事とも (15ウ)	なとをめやすきこととも (18オ) <small>いとイ</small>
6	聞えよとの給ふにかはかりまで (19オ)	聞えよとの給ふにかはかりまで (22オ) <small>をイ</small>
7	母うへ聞てほめ給しかと (20ウ)	はうへ聞てほめ給しかと (24ウ) <small>よしとのイ</small>
8	いたうをひれ (20ウ)	いたうをひれ (24ウ) <small>ほイ</small>

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
尋ねよりけるにや (83ウ)	伊せかかゝることをしけるよ (73ウ)	故郷は浅ちかはらとなりはてゝ (72ウ)	思しりかほにみせんも (72オ)	した萩の露きえわひし (66オ)	すきにしそのころもかやうにこそ (66オ)	齋宮 <small>春イ</small> にそさふらひける (60ウ)	忍はせ給なり <small>めイ</small> (33ウ)	この御前の御はゝ (26ウ)	をれかへりくひく (22オ)	かゝることの聞えしと <small>ありイ</small> (21オ)	これよりのち <small>そイ</small> (21オ)
たつねよりにけるにや <small>こそイ</small> (102ウ)	いせか <small>まイ</small> かゝることをしける (89ウ)	ふるさとはあさちかはら <small>になしイ</small> と成はてゝ (88オ)	思 <small>ものイ</small> ひしりかほにみせんも (88オ)	したおきの露 <small>にイ</small> きえわひし (80ウ)	すきにしそのころも <small>はイ</small> かやうにこそ (80オ)	齋宮 <small>春イ</small> にそさふらひける (73ウ)	忍はせ給なり <small>めイ</small> (41オ)	このおまへの御は <small>御せんイ</small> ゝ (32オ)	たれかへりくひく <small>おイ</small> (26オ)	かゝることの聞えしと <small>ありイ</small> (25オ)	これよりのち <small>そイ</small> (24ウ)

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
大将のわか物におもひ聞たるもうらやましく (110オ)	猶むかしよりさふらひ給し (110オ)	おなし色 <small>桜イ</small> のさうのうはき (102ウ)	なかき世のためしと (102オ)	近衛つかさの使に (101オ)	小宰相とてさふらひける心はへかたち (91ウ)	おほしわくにはあらねとたゝ世に (90ウ)	おなし本 おやさまにそ (87ウ) イ	おほい殿に聞えさせ給へは (87ウ)	返々もの給せて (87オ)	又いかに心え給にかとおほせは (87オ)	こゝにみな思まうけたれと (86ウ)
大将 <small>をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとするイ</small> のわか物におもひ聞えたるもうらやましく (134オ)	猶 <small>むかしイ</small> ふるくよりさふらひ給し (133ウ)	おなし色 <small>桜イ</small> のさうかのうはき (125オ)	なかき <small>よのイ</small> ためしと (125オ)	兵衛つかさ <small>イ</small> 近衛つかさのつかひに (123ウ)	こさいしやうとて心 <small>そさふらいけるイ</small> はへかたち (112オ)	おほしわくにはあらてたゝ世 <small>ねとイ</small> に (110ウ)	おやさま <small>イ</small> おなしさまにそ (107ウ)	おほきおとゝ <small>イ</small> 大殿に聞えさせ給へは (107ウ)	かへすくもえの給 <small>聞えイ</small> はて (106ウ)	又いかに思 <small>心えイ</small> ひ給にかとおほせは (106ウ)	こゝにみな思まうけたれと <small>はイ</small> (106ウ)

(1) 元齋本卷三の異本注記

表2の三九箇所の中に、元康本にしか異本注記の存在しない箇所は二本で本文が異なるものもあり、二本が同じ本を書写したものではないことが確認できる。次に、検討しやすいように元齋本の卷三に存在する六箇所の異本注記と、それに対応する元康本の異本注記を表2より抜き出して表示しなおす。

39	齋院のあやえ (130オ)	齋院のあやえ (158ウ)
38	立かへり岩まの水もかひなきに (126ウ)	たちイ 岩イ 八千かへりくひまの水もかひなきに (154オ)
37	今はうき世のほたしにて (124オ)	はくゝみたてイ 今はうきよのほたしにて (151オ)
36	御とのこもらさりけり (122オ)	さりけりなイ 御とのこもらぬなりけり (148ウ)
35	かの身によそへられ給ひけん (115ウ)	給イ かの身によそへられたりけむ (141オ)
34	御そのなよらかなるに (115オ)	らイ 御そのなよらかなるに (140オ)
33	結ひとゝめよ (114ウ)	よイ むすひとゝめは (140オ)

△表3▽

	元 齋 本	元 康 本
9	これよりのち (21オ) <small>そイ</small>	これよりのち (24ウ) <small>そイ</small>
10	かゝることの聞えしと (21オ) <small>ありイ</small>	かゝることの聞えしと (25オ) <small>ありイ</small>
13	忍はせ給なり (33ウ) <small>めイ</small>	忍はせ給なり (41オ) <small>めイ</small>
14	齋宮にそさふらひける (60ウ) <small>春イ</small>	齋宮にそさふらひける (73ウ) <small>春イ</small>
25	おやさまにそ (87ウ) <small>おなし本 イ</small>	おやさまにそ (107ウ) <small>おやさまイ</small>
30	おなし色のさうのうはき (102ウ) <small>桜イ</small>	おなし色のさうかのうはき (125オ) <small>桜イ</small>

この六箇所について元康本と比較すると、9・10・13・14の四箇所は本文・異本注記ともに同じである。そして30の箇所は校本(p345)に「さう」の本文をもつものがないことより、元齋本は親本にあった「さうか」の「か」を脱落させたものであり、もとは本文・異本注記ともに元康本と同じであったと推測される。25も元康本の書き入れとの関連が窺われる。そして元康本の異本注記が三八箇所へのぼるのに対して元齋本は六箇所にすぎず、この六箇所では二本の本文・異本注記とも同文あるいは関連があることから、元齋本に存在する異本注記は、元康本を底本にして行なわれた校合作業の際に、たまたま元齋本へも書き入れがなされたものである、と推測される。

ところで元齋本の25は、元齋本の本文「おやさまにそ」の左に「イ」と注され、本来は異本注記の記される位置にある注「おなし」に「本」と付されていて、特異な形態をなしている。元康本の巻二にも同様の特異な形態の注記がある（後に取り上げる）ので、元齋本が書写間違いを訂正したものというよりは、それぞれの親本の特異な形態の注記を写したものと推測される。通常は、元康本の「おなしさまにそ」に「おやさまイ」と注記がなされた際に元齋本へも注記をするとすれば、元齋本は

おなしイ
おやさまにそ

となるはずである。しかし、実際には

おなし本
おやさまにそ
イ

となっている。紹巴がこのように注した意味を推理する助けになるものに、次の『下紐』の簡条がある。

一 立かへり岩間くゐの くるまとあり 杭間の水 八千かへりくひまは 後悔歟 さる時はくひまは詞のいはまほしのみ歟 杭を悔にして歟 又立かへりいひてもなれは岩間もよき歟 よし見よはおもひ死ならんと也（元康本74オ）

『下紐』のこの簡条では、「立かへり岩間の」は元齋本の本文であり、解説にひかれた「八千かへりくひま」は、元康本の本文である。この簡条の「：歟」と重なる解説文からは、紹巴が『狭衣物語』の本を集め諸本から採用すべき本文を選び出す姿勢、つまり校訂本文の作成を志していたと見てとれる。よって、標目に併記された「立かへりくる間の」が校本にもないことから、こちらは、紹巴の校訂本文の案である可能性がある。この諸本から採用すべき本文

を選び出したり、校訂をする姿勢が、まま見られる物語から抜き出した場合の標目と底本（巻一は元齋本、巻二～四は元康本）との不一致を生じさせる一因になったと知られる。そしてこの箇条からは、『下紐』を著述する段階になっても、なお『狭衣物語』のあるべき本文を決めかねている箇所が残されていて、紹巴が苦闘する姿が伝わってくる。これを考え合わせると、紹巴施注を写したこの特異な異本注記は、『狭衣物語』を読み解くにあたって紹巴が「おなしまにそ」の本文を捨て「おやさまにそ」のほうを採るべきかどうかを思案した形跡であり、紹巴の結論としてこの箇所は元康本の親本の「おなしまにそ」の本文のままでよいと判断し、元齋本の親本の「おやさまにそ」の本文のほうはやはり異本の本文として扱おうと位置付けた記録ではないかと推測される。そして、他の巻も含め元康本と元齋本においても紹巴の校合作業が悉皆調査になっていないのは、『下紐』の著述に役立ちそうにない校異には無関心であったからと推測される。

(2) 元康本巻三に注記された異本

元康本の異本注記には、元齋本との校合によるものが含まれていると推測され、これに該当するものは、2・4・5・11・22・25・26・29・31・33・34・35・38の一三箇所である（ただし表記の差を無視する。以下同じ）。元齋本から注記されうる計一三箇所を除外した二六箇所について、「校本」によって、異本注記の本文を持つ本を書き出す。なお異本注記と同じ本文をもつものがない場合、異本注記に近い本文をもつものがあれば（ ）内に記す。

△
表
4
▽

39	37	36	32	30	28	27	24	23	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	10	9	8	7	6	3	1
			(諸本にナシ)		深武	(諸本にナシ)				(深・武・四・内)	(諸本にナシ)								深武		深武	(深・武・四・宝・内)			
四																			四		四				
宝																			宝		宝				
内																			内		内				
				為															為					為	
				吉									吉						吉					吉	
				鎌						鎌		鎌	鎌						鎌					鎌	
				蓮	蓮							蓮	蓮						蓮					蓮	
鈴				鈴						鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴
雅				雅						雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅	雅
書				書						書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
													前						前				前		
									文							文							(文)		
				龍	龍	龍	(龍					龍				龍						龍			
					中		中									中						中			
					松											松									
												井													
				淡																					
				東									東												
(黒)																									
										大	大	大							大						
																			京		京	京			

(なお表2の22と23は一続きの本文であり、全体では元康本の異本にあたるものが諸本に見つかからないが、紹巴の校合に局部的なものが存在することからは、二つに分離して考えても差し支えないものと考えた)

次に示す14・21では、文禄本が一本のみ該当する(校本p206およびp209。以下同様に校本頁数を示す)ので文禄本を異本の一本とする。6は「諸本にナシ」で処理すべきかもしれないが、文禄本が「の給ふをかはかりまで」(p68)の部分が一致する。なお以下で*印は異本の示す本文を推定したもの、○印は異本の本文に一致するもの、※印は異本注記に誤写や位置ずれのあることを、あるいは本文そのものに誤写があることを想定し補正すれば異本の本文に一致するもの、△印は酷似する、あるいは局部的校合で一致するものである(以下、同様)。

- | | | |
|----|---|---|
| 14 | 齋宮にそさふらいける <small>春イ</small> (康73ウ) …………… | *春宮にそさふらいける(文禄本の本文掲出略) |
| 21 | こゝにみなまうけたれと <small>はイ</small> (康106ウ) …………… | *こゝにみなまうけたれは(文禄本の本文掲出略) |
| 6 | 聞えよとの給ふにかはかりまで <small>をイ</small> (康22オ) …………… | *聞えよ・との給ふをかはかりまで
文禄本 …………… △聞えよかしの給ふをかはかりまで(14オ) |

次の24では龍谷甲本と松浦本の二本が該当するが、表4において松浦本よりも龍谷甲本が頻出しているので龍谷甲本を異本の一本とする。なお龍谷甲本によって記入できる箇所は、13・17・27・30(本文の掲出を略す)もある。

24 おほきおとゝに聞えさせ給へは (康107ウ)

……………

*おほきおとゝに聞えさせ給へは

龍谷甲本 ……………

○おほきおとゝにきこえさせ給へは (74オ)

松浦本 ……………

○おほき大臣・にきこへさせ給へは (p292)

また次に示す23については、異本の本文は「かへすくもえ聞え給はて」であるはずだが校本に見当たらない。注記に位置ずれが生じていると推測して「かへすくも聞え給はて」と読めば龍に一致するので、24で異本の一本とした龍谷甲本から得たものとする。

23 かへすくもえの給はて (康106ウ)

……………

*かへすくも聞え給はて

龍谷甲本 ……………

※返・々・もきこえ給はて (73ウ)

次の7については、異本の本文は「はゝうへ聞てよしとの給しかと」であるはずだが校本(p74)に見当たらない。ただし局部的校合と推測して「よしとの給しかと」の本文を持つものを検索すると深・四・書・龍・前・京があるので、既に異本の一本とした龍谷甲本から異本注記をしたものとする。

7 はゝうへ聞てほめ給しかと (康24ウ)

……………

*はゝうへ・聞・てよしとの給・しかと (校本にもナシ。p74)

龍谷甲本 ……………

△はゝうへもきゝ給てよしとの給ひしかと (18オ)

次の37の異本注記をどのように読むかについては、寛佐本の本文「今ははくゝみたてゝうき世のほたしにて」を参照すると、元康本の異本注記に「て」の脱落があると判断され、脱字を補正すれば黒川十二冊本に一致する。黒川十二

冊本を異本の一本とすることが出来る。

37 今はくゝみたてはうきよのほたしにて (康15オ) ……………

黒川十二冊本 ……

* 今はくゝみたてはうきよのほたしにて
※ 今はくゝみたてはうきよのほたしにて (九17ウ)

次に示す1・12・15では鈴(巻一・二・三ともに鈴鹿乙本・雅章本・書陵部四冊本の三本が属する)のいくくりの本のみ該当するので、このなかの一本を異本とする。なお、3・8・9・10・16・18・20・30・39(本文の掲出を略す。ただし20は局部的校合)も鈴によって記入できる。

1 ありなしのたまのゆくゑにまとはさて夢にもし (康5ウ) * ありなしのたまのゆくゑにまとはして夢にも (本文掲出略。p22)

12 このおまへの御は、御せん (康32オ) …………… * この御せんの御は、(本文掲出略。p97)

15 すきにしそのころもかやうにこそは (康80オ) …………… * すきにしそのころはかやうにこそ (本文掲出略。p222)

次に示す32については、異本の本文は「大将をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとする」であり、淡川本・東大本がこの本文を持つ(p374)。**押**に分類されている東大本の名があがるとなると、『下紐』を書写している宗具の識語を持つ押小路本(9)が気になる。見ると押小路本の本文は酷似している。押小路本は親本の「へ」が「給」の草書体の一部分と見誤られたことによる脱字が起きたのであり、本文の一致する淡川本・東大本ではなく、押小路本(10)の親本を異本注記に用いた本と考えるべきであろう。なお押小路本と兄弟関係であろうと推測される本に祐範本(10)があるが、本稿では省略する。

32 大将のわか物におもひ聞えたるもうらやましく(康134オ) *大将をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとする
をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとするイ

淡川本・東大本……………○大将をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとする

押小路本……………※大将をたのみ給へらんよりはなとかはあらんとする

ただし次の19・28・36については、異本にあたる本文をもつものが諸本に見当たらない。このような本文をもつ不祥の本を紹巴は見たのであろうか。一応、不祥の本を用いたと考えておく。

19 いせかかゝることをしける(康89ウ)……………*いまかゝることをしける(校本にもナシ。p246)
まイ

28 近衛つかさのつかひに(康123ウ)……………*兵衛つかさのつかひに(校本にもナシ。p341)
兵衛つかさい

36 御とのこもらぬなりけり(康148ウ)……………*御とのこもらさりけりな(校本にもナシ。p419)
さりけりない

以上の検討により、元康本への異本注記の際に紹巴が使用した本は、元齋本・文禄本・龍谷甲本・**鈴**の一本・押小路本・黒川十二冊本(多くはそれぞれの上位の本、そして少数はその本そのもの)であり、そして他にも不祥の本(本数も不祥)を用いたのであろう。

(3) 卷三における『下紐』所引の異本および標目

元齋本と元康本を検討することにより紹巴が用いた異本の見当がついたので、『下紐』において異本に触れる箇条も見ておきたい。『下紐』は元康本下紐を掲出する。

まず次の簡条では、標目の「にふく」に対して、異本は「きはく」の本文を持つことが分かる。押小路本は、「よはく」であるが、紹巴披見の親本の草かな「支」を「与」と誤写した可能性が大きい。文禄本を、そして押小路本をも異本に該当するものとする。

一 にぶく 異本きはくしき事を見さらん人のやうにとあり(63ウ)

標目採用本文(巻二・三・四において元康本が該当する場合は他本が同文であっても省略する場合がある。以下同じ)

* にふくしきことをしたらはこそあらめ口きよくもの給ものかな(康60ウ。他に斎・龍・鈴・黒)

異本本文(掲出本は、既に異本として名の上がつたものから選んだ。以下同じ)

* きはくしきことを見たらむ人のやうに口・きよくもの給ものかな(文禄本₂₁₇₃。押小路本は「よはくしき」)

次の簡条は、「異本可用也」の解説が「底本の「心ゆかすなからけふ」の箇所は異本のほうがよい本文だ」という意味であるので、傍線部「けふ」を持つものが標目に続く本文であり、「けふ」でないものが異本の本文ということになるが、各本の本文を見ると「けふ」ありける」のないものが異本と判断でき、文禄本・鈴の一本・押小路本が異本に該当する。

一 さこそはあなち 入道宮御連枝難放御宿執と也 心ゆかすなからけふ 異本可用也 のかれかたかりける ぬれきぬ

前哥あり ふところかみは入道宮に逢初給ひし時也(68ウ)

標目採用本文

* さこそはあなちなる心もつかはさらめ もてはなれたりける御すくせともかな 心ゆかすなからもけふまでみ奉る人はなくやはありける のかれかたかりければこそ思ひかけさりしぬれきぬさへほしわひて(元康本₁₁₁オ。)

異本本文

* さこそはあなちなるこゝろもつかはさらめ もてはなれたりける御すくせともかな 御こゝろゆかすなからものかれか

たかりければこそ思ひかけさりしぬれきぬもほしわひて（文禄本 p303。他に〔鈴〕の一本・押小路本）

次の箇条では標目が「立かへり岩間の」と、校本にない「立かへりくる間の」とが併記され、「八千かへりくひま」も異本とはしていない。よって異本に触れる箇条ではないが、再度取り上げておく。『狭衣物語』の本文校訂を志していたであろう紹巴が、「立かへりくる間の」という本文を案出し、結論が出せないままに終わったものであろう。

一 立かへり岩間の ^{くゐ} 　くゐまとあり　杭間の水 ^{八千かへりくひまは後悔歟}　さる時はくひまは詞のいはまほしのま歟

杭を悔にして歟　又立かへりいひてもなれは岩間もよき歟　よし見よはおもひ死ならんと也（74オ）

標目採用本文

* 立かへり岩まの水もかひなきによし見よおなし影やみゆると（斎126ウ。他に龍）

解説引用本文

^{たちイ}　^{岩イ}

* 八千かへりくひまの水もかひなきによしみよおなしかけやみゆると（康154オ）

次の箇条の標目本文「世やつきぬらん」は校本になく、版本（狭衣物語）が異本注記として載せている。

* いみじうのみおぼされてたゞ ^{、つきぬイ} やちかゝらん（版三下44オ）

この版本の注記は、『下紐』を参照したものであるので、標目本文「世やつきぬらん」は狭衣諸本に見あたらないことになり、異本として示されている「世やちかゝらん」の本文が大勢をしめる。この標目は、猪苗代兼寿の『さころも抄』⁽¹⁾が指摘するように、『源氏物語』榊卷にある。「世やつきぬらん」という本文を持つ不祥の本もあったのかもしれないが、『狭衣物語』の本文校訂を目指す紹巴の所業という疑いが濃い。

一 世やつきぬらん ちかゝイ 引哥 暮ぬれは斎院のおはします対へなり (75ウ)

標目採用本文

* 世やつきぬらむとてのかたをみいたし給へるかたはらめ (『源氏物語大成』第二冊 p351)

異本文

* よやちかゝらむ (元康164オ。斎・陽・雅・龍・押ほか)

次の三箇条は、異本文が示されていない。まず「しかる」の箇条では、「天下はいたしやらし」の本文を持つものが校本 (p147) にもないので、「天下はいたしやらしと。異本あり」と解説されていると推測される。「なにの物かたり」の箇条では、紹巴は古物語の名の書かれた本文を異本でみつけようと心がけたが見つけられず異本文を記入しないままになったのであろう。「行かへり哥」の箇条では「こゝほと異本あり」と解説するだけである。

- 一 しかる 叱字歟 天下はいたしやらしと 異本あり (62ウ)
- 一 なにの物かたり 異本 古物語あるへし (65オ)
- 一 行かへり哥 こゝほと異本あり 身は中空に成ねとや さば さらは也 世をひたとすてん事さすか也 源氏の宮の御心もとけぬと也 (76オ)

次に元康本の異本注記に使用されたと推測された本 (不祥の本については省略) のうち『下紐』の標目に一致するものを示す。これらは、『下紐』巻三の底本は元康本であるという原則からはみ出した箇条である。なお表5の5に鈴の一本である書陵部四冊本の名が上がってくるので、鈴の一本とは書陵部四冊本であると判明する。

△表5▽

	標目 (元康本下紐)	標目に一致する本*
1	そのうち若宮をは(68ウ)	元斎本(89オ)
2	立かへり:(74オ)	元斎本(128ウ。龍も)
3	かみさうし(58オ)	龍谷甲本(2オ)
4	かのはくと(61オ)	龍谷甲本(17ウ。押・黒も)
5	いふへきことも(60ウ)	書陵部四冊本(p73)

* 異本として名の上がったものから選んである。

以上の調査により、紹巴は卷三においては元康本を底本に、元斎本・文禄本・龍谷甲本・書陵部四冊本・押小路本・黒川十二冊本(多くはそれぞれの上位の本、そして少数のその本そのもの)および不詳の本をも読み比べて『狭衣物語』を読み解き、『下紐』を著述したと推測される。特に「立かへり岩間の」「世やつきぬらん」の二箇条からは、紹巴が『狭衣物語』の本文校訂を目指していたのが窺え、この姿勢が底本の元康本以外のものを標目に据えることになったり、一箇条のみではあるが『源氏物語』の本文から標目に据えることになったりしたのである。

2 卷二の検討

紹巴は卷三で元康本を底本にして校合したと判明したが、それでは卷二ではどのようなのであろうか。まず元斎本・元康本のいずれかに異本注記のある箇所を拾い出す。

△表6▽

	元 齋 本	元 康 本
11	ゆくすゑまでの人の御うへ <small>御うへもイ</small> をさへたとらて (20オ)	行末までの人の御うへもたとらて (21オ)
10	人しれぬ心のうちには思へととかく (19ウ)	人しれぬ心のうち。 <small>イ</small> にはおもへととかく (20オ)
9	ためしあらんや大将 <small>左イ</small> のなへてならぬありさま (16ウ)	ためしあらんやさ大将のなへてならぬ有さま (17オ)
8	しろきしきしなといへは (16オ)	しろきしきしなといへと <small>はイ</small> (16ウ)
7	右近の陣のとき申も (15オ)	左近のちむの <small>。イ</small> にや時申も (15ウ)
6	こけ <small>も心イ</small> のみたれまさりつゝ (13オ)	こけも心のみたれまさりつゝ (13オ)
5	さふらはていさとかく御かたはらに (11ウ)	さふらはてみやと <small>、イ</small> のいさとかく御かたはらに (12オ)
4	下 <small>下イ上イ</small> からはらふし給へる御くしの (10オ)	かたはらふし給へる御くしの (10オ)
3	いつれかいつれともみえわかれ給はす <small>とみイ</small> (9ウ)	いつれかいつれともとみにわかれ給はす (10オ)
2	きさいはらにおはすれとさしもあるましき (7オ)	きさきはらにおはすれと <small>、イ</small> もさしもあるましき (7オ)
1	大将にしかくうへのたまはせつるを (5ウ)	大将 <small>の君イ</small> にしかくうへのゝ給せつるを (5ウ)

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
心ちとゝめてすくしゝはものにもあらさり… (97オ)	神のいかきにたつさはらせ給はんことは (94オ)	からくにの中納言 (94オ)	この世のかなしさをいつれのおりにか (84オ)	光源氏のすまのうらにしほたれ給けん (75ウ) わひイ	からとまりそのもくつを… いはまを… (75オ) とイ 波イ	たいらかにたにおはしまさはと (57オ) そきはてゝイ	あまのかる藻のこゝろつきなさは世に (54ウ)	いとこゝろうくるしくてひとりの御事を (51ウ)	めやすかるへき事とおもはさりつるには (27オ)	大将とのゝまいらせよとてこれを心つかひにて (24オ)	大宮の御心のうちそいとおしき此御かた人に (24オ)
心ちとゝめて過ししは物にもあらさり… (100ウ) ほと心のこゝろにこめイなにイ	神のいかきにたちそはせ給はむことは (97ウ) つわらせ	から国の中將 (97ウ) 中納言イ	このよのかなしさはいつれのおりにか (88オ) をイ	ひかる源氏のすまのうらにしほたれわひ給けん (79オ) ゝイ	からとまりそのもくつと… いは波… (78ウ)	たいらかにたにおはしまさはと (60ウ)	あまのかるてふ心つよさは世に (57ウ) ものイ きなイ	いと心くるしくてひとりの御ことを (54ウ) うくイ	めやすかるへき事と月ころおもはさりつるには (28ウ) ゝイ	大将殿のまいらせよとて是を心つかひにて (25ウ) ゝイ	大宮の御心のうちそいとおしきこの御かた人に (25オ) イ無

28	心ふかくてなかとのかみの北方は (113ウ) <small>一とせなんイ</small>	心ふかくて一年なんなかとのかみの北方は (117ウ) <small>イ無</small>
27	こゑのたうときしてよむなる (111ウ) <small>にイ</small>	こゑのたうときにてよむなる (115ウ)
26	かのそこのみくつもおほし出られて (108ウ) <small>みイ</small>	かのそこのみくつもおほし出られて (112ウ)
25	わか恋のひとかたならす…たのみたになし (98オ) <small>せすイ</small>	わか恋の一かたならす…たのみたにせず (101ウ) <small>なし本 イ</small>
24	かのみち芝の露もこのつらと思いつへきには (97ウ)	かの道芝の露もこのつらにおもひ出へきには (101オ) <small>とイ</small>

(1) 元齋本巻二に存在する異本注記

元齋本に存在する一二箇所³の注記を分類するために、まず3について検討する。元齋本の異本注記の示す本文は、「いつれかいつれともみわかれ給はす」となるが校本 (p48) になく、注記に位置ずれがあるとすれば異本注記の示す本文は「いつれかいつれとみわかれ給はす」となるうが、これも校本にない。そこで元齋本と元康本を比較すると、元齋本の異本注記「とみイ」は「とみにイ」の誤りである可能性が高い。

3 いつれかいつれともみえ・わかれ給はす (齋9ウ) …

※いつれかいつれともみ・わかれ給はす
※いつれかいつれともみにわかれ給はす (康10オ)

3の検討がすんだところで、元齋本に存在する一二箇所^イの注記は、次のとおり分類できる。

- イ 元康本から記入できるもの…………… 6・9・11・18・19・25・26・27・28
- ロ 誤りを補正すれば元康本からの記入と考えられるもの…………… 3
- ハ 元康本以外の本から記入できるもの…………… 4・17

一二箇所のうち一〇箇所は元康本との校合から書き入れたものと言えるが、4・17の二箇所は元康本から書き入れたものではない。そこで4・17の異本注記の推測本文三例を校本(p48. p252)などによって検索した。しかし、この本文が見当たらない。4・17については、元から存在した注記かもしれないが、不祥の本による書き入れとしておく。

- 4 下イ上イ からはらふし給へる御くしの(齋10オ)…………… *はらからふし給へる御くしの(校本にもなし)

*下はらふし給へる御くしの(校本にもなし)
*から上ふし給へる御くしの(校本にもなし)

- 17 そきはてゝイ たいらかにたにおはしまさはと(齋57オ)…………… あたりに「そきはてゝ」の本文なし(校本にもなし)

(2) 元康本巻二に存在する異本注記

元康本に存在する一九箇所の異本注記を分類するために、まず次に示す7・22について検討する。7の元康本の異本注記の示す本文は「左近のちむの時申も」と推測され、校本(p76)で版本しか検索できない。元齋本の「右近の陣のとき申も」は校本で押・黒も同文であると検索でき、親本も「右近の…」であったのかもしれないが、元康本の異本注記の示す本文「左近のちむの時申も」にも近いことから、元齋本の親本の「左近」を「右近」と誤写した可能性が高く、元康本の異本注記は元齋本から得られたと推測される。

7 左近のちむの^{。イ}にや時申も(康15ウ)

…………… * 左近のちむの時・申も
元齋本 …………… ※右近の陣・のとき申も(15オ)

次の22の元康本の異本注記の示す本文は、「神のいかきにたつわらせ給はむことは」と推測されるが校本(p413)に
なく、近い本文「神のいかきにたつさはらせ給はむことは」で押・黒が検索できるので、異本注記の「つわらせ」は
「つさわらせ」の誤りであり、本来の異本注記の示す本文は「神のいかきにたつさわらせ給はむことは」であったと
推測され、表記の差を無視すれば元齋本から注記できることになる。

22 神のいかきに^{つわらせ}たちそはせ給はむことは(康97ウ)

…………… * 神のいかきにたつ・わらせ給はむことは
元齋本 …………… ※神のいかきにたつさはらせ給はんことは(94オ)

7・22の検討がすんだところで、元康本に存在する一九箇所^ニの注記は、次のとおり分類できる。

ニ 元齋本から記入できるもの …………… 2・5・8・14・15・16・19・20・21・24・25・28
ホ 書写時の誤りを補正すれば元齋本からの記入といえるもの …………… 7・22
ヘ 元齋本以外の本から記入できるもの …………… 1・10・12・13・23

ところで、巻三で元齋本に見られたのと同様な特異な注が巻二の元康本にも見られる。

25 わか恋の一かたならす…たのみたに^{なし本}せす(康101ウ)
…………… ^イ

わか恋のひとかたならす…たのみたになし^{せすイ}(齋98オ)

巻三と同様に考えると、『狭衣物語』を読み解くにあたって、ここは元康本のほうではなく元斎本の本文のほうを採るべきだとする紹巴の記録なのであろう。

(3) 巻二での校合作業時の底本

(1)(2)での二本に存在する異本注記の分類Ⅰへにおいて番号の重出する19・25・28は二本互いに書き入れられたものである。3・7・22もそれぞれ元康本と元斎本との校異をとった注記であるとし、もう一度Ⅰへを分類しなおすと次のようになる。

A	元斎本を底本に他本との校異をとったもの……………	4・17
B	元斎本を底本に元康本との校異をとったもの……………	3・6・9・11・18・26・27
C	互いに校異をとったもの……………	19・25・28
D	元康本を底本に元斎本との校異をとったもの……………	2・5・7・8・14・15・16・20・21・22・24
E	元康本を底本に他本との校異をとったもの……………	1・10・12・13・23

1から28まで順次書き入れが行なわれたとして注記の手順は、E↓D↓B↓A↓D↓B↓D↓B↓E↓B↓E↓D↓A↓B↓C↓D↓E↓D↓C↓B↓Cと、めまぐるしく変わっている。元康本を底本にして開始された作業(E D)は、途中でめまぐるしい変化があり、最終的には、元斎本を底本にしての作業(B)の後、互いに校異をとった作業Cをみる(表7参照)。このめまぐるしい変化は、紹巴が巻二の時点では『下紐』の底本を元康本と元斎本の二本のいずれを底本にするかを迷いながら校合しているのを反映しているのではないだろうか。

△表7▽

DE	康が底本	
C	互いに校合	
AB	斎が底本	
1		
2		
	3	
	4	
5		
	6	
7		
8		
	9	
10		
	11	
12		
13		
14		
15		
16		
	17	
	18	
	19	
20		
21		
22		
23		
24		
	25	
	26	
	27	
	28	

(4) 元康本巻二に注記された異本

それでは次に元康本の異本注記を検討すると、一九箇所の注記のうち一四箇所は元斎本との校合から書き入れたものと言えたが、1・10・12・13・23の五箇所は元斎本から書き入れたものではない。そこでこれら五箇所の異本注記の本文を校本によって検索する。まず1に関して異本の本文は「大将の君にしかくうへのゝ給せつるを」であり、この本文をもつものに蓮・武・東・龍・中・大があるので、巻三で使用された龍谷甲本によって、記入できる。

1 大将にしかくうへのゝ給せつるを（康5ウ） の君イ

龍谷甲本…………… *大将の君にしかくうへのゝ給・せつるを
○大将の君にしかくうへのゝ給はせつるを（p30。5ウ）

また12の元康本の注記「イ無」は28の元康本にも見られ、その注記が付された本文が異本にないことを示しているの
で、12では「この」が異本にないことを示し、異本文は「大宮の御心のうちそいとおしき御かた人に」と読める。
しかしこの異本文を持つ本は校本（p12）にない。ただし注記に位置ずれがあるとすれば、この辺りで「この御
かた人…」の約三〇字の本文を持たない吉・松・押が検索できる。巻三で用いたとした押小路本によって記入さ

れた可能性がでてくる。

- 12 大宮の御心のうちそいとおしきこの御かた人にイ無(康25オ) … *大宮の御心のうちそ・いとおしき(約三〇字の本文ナシ)

押小路本 …………… *大宮の御心のうちそいとくをしき(約三〇字の本文ナシ)

23 については、注記から読める「心ちほと心のこゝろにこめて過ししはなににもあらさり…」の本文をもつものが校本に見当たらない。注記の下方への位置ずれがあると推測し異本本文を、「ほと心の心のこゝろにこめて過ししはなににもあらさり…」と読むと、酷似する押・東・黒が検索できる(p24)。巻三で使用された、押小路本あるいは黒川十二冊本で記入された可能性がでてくる。

- 23 心ちとくめて過ししは物にもあらさり…(康100ウ) …… *ほと心のこゝろにこめて過・ししはなににもあらさり…
ほと心のこゝろにこめイなにイ

押・東・黒 …………… △ほと心のちこゝろにこめてすくしはなににもあらさり…

10・13 については、異本注記の本文を持つものが検索できない。不詳の本によったとしておく。

- 10 人しれぬ心のうち。イにはおもへととかく(康20オ) …… *人しれぬ心にはおもへととかく(校本にナシ。p94)

- 13 大将殿のまいらせよとて是を心つかひにて(康25ウ) …… *大将殿のまいらせよとて心つかひにて(校本にナシ。p113)

巻二の異本注記に用いられた本については、巻三で用いられた本のなかの書陵部四冊本が出てこない。念のため『下紐』を調査しても書陵部四冊本がなければ書き記せないという標目もないが、後出の巻一の調査では、書陵部四冊本が出てくるので、記すに到らなかっただけなのであろう。元康本・元斎本・龍谷甲本・押小路本(あるいは黒川

十二冊本）は巻三と共通している。他に不詳の本も用いたようである。

(5) 巻二における『下紐』所引の異本および標目

『下紐』巻二の異本に触れる箇条を、表 8 にまとめて示す。元康本と、巻三で異本として名の上がった本を用いて、これらの箇条も書ける。

△表 8▽

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	標目（元康本下紐）	標目本	異本文	異本*
	から国の中将 ^{納言イ} （54ウ）	春宮 ^{のイ} ゐさせ（53ウ）	いてやいと…（47オ）	うへの（44オ）	心のみたれ（43オ）	そこらはふき（43オ）	大宮のおはし（42ウ）	そはたかきも（41ウ）	かしこまり（41オ）				
	康（97ウ）	文（p377）	康（40オ）	康（18ウ）	黒（三12オ）	康（13オ）	康（12オ）	康（7オ）	康（5オ）				
	から国の中納言	春宮のゐさせ…	（示されず）	（示されず）	苔のみたれ	（示されず）	「宮殿」ナシ**	（示されず）	（示されず）				
	元齋本（94オ。書・文・押・黒も）	元康本（88ウ。齋・押・黒も）	/	/	元齋本（13オ。押も）	/	元齋本（11ウ。龍・押も）	/	/				

* 異本としての名の上がったもののなかから選んである。

***『下紐』の「大宮のおはし」の解説文中の「宮殿イ」は、元康本『狭衣物語』の本文

大宮おはしまさぬ程にさふらはでみやとのいさとく…

から判断すると、「異本には「宮殿」の本文がない」という意味である。

また標目は物語から抜き書きされた場合は原則として巻二も元康本によっているが、この原則に入らないもの（表記の差は無視）を表9に示す（なお不祥の本は省略した）。**印を付した京大五冊本は、巻三の調査において表4の7・8・12に上がっているが、書陵部四冊本の影に隠れて異本の一本とするまでは到らなかったが、巻二の「ことのほかにも」の箇条の標目に一致しているので、これをも異本の一本とする。

△表9▽

	標目（元康本下紐）	標目に一致する本*
1	いけてみん（52オ）	元齋本（74オ。他に多数の本）
2	お花かもの（40オ）	龍谷甲本（1オ。文・押・黒も）
3	宰相（42ウ）	書陵部四冊本（p57。文・京も）
4	なに事も（51ウ）	押小路本（p308）
5	おもふ心ことなる（53ウ）	押小路本（p367。京・黒も）
6	心のみたれ（43オ）	黒川本（三12オ。龍も）
7	ことのほかにも（49オ）	京大五冊本（p237）**

* 異本として名の上がったもの
なかから選んである。

巻二の調査では、紹巴が元齋本と元康本のいずれを『下紐』の底本とすべきかと迷った形跡が窺えた。また京大五冊本をも異本の一本とした。

3 巻四の検討

まず、元齋本・元康本のいずれかに異本注記のある個所を列举する。

△表10▽

	元 齋 本	元 康 本
1	まこと院 <small>やイ</small> の女御は五せちのほとにほりかはの院に(13ウ)	まこと院 <small>やイ</small> の女御は五せちの程に堀川の院に(16オ)
2	物おそろしからてす <small>きゝくしてイ</small> こし末のなからへ(21オ)	ものおそろしからてす <small>きゝくしてイ</small> すゑのなからへ(25ウ)
3	かのあきらかなりし <small>ひかりイ</small> おもかけはさりとも(24オ)	かのあきらかなりし <small>ひかりイ</small> 面影はさりとも(29オ)
4	なとてかはとこそ思ひ侍れとのおほし(31ウ)	なとてかはとこそ思ひ侍れとのおほし <small>とイ</small> (37ウ)
5	よに思ひならしとおほすもくちおしきを <small>かりけりイ</small> (39オ)	よに思ひならしとおほすも口おしきを <small>かりけりイ</small> (47ウ)
6	このふる人 <small>老イ</small> ものたくひなかりしちこさま(39ウ)	このふる人 <small>老イ</small> ものたくひなかりしちこさま(48オ)

13	宮うせさせ給てのちはほり河の院も大宮も (121ウ)	宮うせ給て後はほり川の院。も大宮も (149オ)
12	さま／＼うちとけてかい給へるすみつき (86ウ) <small>にかきませイ</small>	さま／＼うちとけてかい給へるすみつき (106ウ) <small>にかきませイ</small>
11	五けん四めむなるしん殿 (78オ) <small>こイ</small>	五けん四めむなる。しん殿 (96ウ) <small>こイ</small>
10	身つからの浅ましうもてなしきこえたるに (76オ) <small>あは／＼イ</small>	みつからのあは／＼しうもてなしきこえたるに (94ウ) <small>さまイ</small>
9	十齋の (63オ) <small>体イ</small>	十齋の (78オ) <small>体イ</small>
8	かた時のほとをたにおほつかなく (53オ)	かた時の程。たにおほつかなく (65オ) <small>をイ</small>
7	すくやかにきこえないたまへと (49ウ) <small>はイ</small>	すくやかにきこえない給へと (61オ) <small>てはイ</small>

(1) 巻四における二本の異本注記

巻四の注記を分類すると次ようになる。なお分類する理由を()内に付すにとどめた。

A 両本の本文・注記とも同文のもの……………

1・2・3・5・6・9・11・12 (2の元齋本の注記には「きゝ」と「くして」の間に空間があるので、異本の本文を「きゝすくして」と読んだ。11は元は同じであった注が位置ずれを起こしたと判断した)

B	両本の本文・注記ともほぼ同文のもの	7
C	元康本の注記の示す本文と元斎本の本文が一致するもの	4・8
D	元康本の注記の示す本文と元斎本の本文が一致しないもの	13
E	両本に存在する注記が互いの本文に一致するもの	10

Aのものからは、両本のいずれを底本にして校合作業を進めているかは判断不能であるが、Cでは元康本を底本にしていると判断できる。巻三で元康本を底本に校合作業を進めていて、ところどころ元斎本へも書き入れを行ったと推測したが、巻四でも同様なであろう。7は二本の注記が一致していないが、親本間での転記の際、あるいは元斎本の書写の際に誤脱が発生したものと推測される。なお、巻三では元康本に存在した注記三九箇所のうち六箇所しか行われなかった元斎本への書き入れが、巻四では一三箇所のうち一〇箇所もあり、元斎本への書き入れの頻度が高まっている。

(2) 元康本巻四に注記された異本

それでは巻四における異本にあたる本を調査する。校本の巻四は存在しないので、巻二・三での調査結果に基づき、元斎本・文禄本・龍谷甲本・雅章本（書陵部四冊本に代えて使用する）・押小路本・黒川十二冊本・京大五冊本にあたり、異本注記の示す本文に同じか、似たものを掲出する。

次の11では、異本文は「五けん四めむなるこしん殿」であり、文禄本が該当する（ただし異本注記の「こ」は「二」を誤写したもの）。なお文禄本により、9も両本へ注記可能である。

- 11 五けん四めむなる^こしん殿（康96ウ）…………… *五けん四めむなるこしん殿

文禄本 …………… ○五けん四めんなる寝・殿(50ウ)

9 十斎体イの(康78オ) ……………

文禄本 …………… *十体・の
○十たいの(42オ。龍谷甲本・前田本でも可)

次の2では異本注記の示す本文は、龍谷甲本と一致する。そして5では、「も」と異本注記の「:かりけり」を、親本の「そ」と「:かりける」を誤写したものと想定すると、龍谷甲本が一致する。3では龍谷甲本が酷似する。

2 ものおそろしからてすきゝすくしてイこしすゑのなからへ(康25ウ) …… *ものおそろしからてきゝすくしてすゑのなからへ

龍谷甲本 …………… ○物・おそろしからてきゝすくしてすゑのなからへ(18オ)

5 よに思ひならしとおほすも口おしきをかりけりイ(康47ウ) …………… *よに思ひならしとおほすも口おしかりけり

龍谷甲本 …………… ※世に思ひならしとおほすそ口おしかりける(32オ)

3 かのおきらかなりしひかりイ面影はさりとも(康29オ) …………… *かのおきらかなりし・ひかりはさりとも

龍谷甲本 …………… △かのおきらかなりし御ひかりはさりとも(20ウ)

次の6は、局部的校合であつたとすれば雅章本が一致する。

6 このふる人老イともものたくひなかりしちこさま(康48オ) …… *この老・人ともものたくひなかりしちこさま

雅章本 …………… △このをい人ともものうつくしかりしちこさま(55オ)

次の1は、京大五冊本が一致する。

- 次の12は、前田本に一致する。ただし注記に位置ずれなどがあるとすれば文禄本とも酷似してくる。

- にかきませい

文禄本

れたのではないかと推測されるが、一応、不祥の本による書き入れとする。7も不祥の本による書き入れとする。

- にイ

- てはイ

して12の異本注記の本文は前田本と一致する。前田本をも異本の一本としておく。

- 二 鈴の一本（雅章本）から注記できるもの……………（6）

(6)

ホ	押小路本から注記できるもの……………	ナシ
ヘ	京大五冊本……………	1
ト	前田本から注記できるもの……………	12
チ	不祥の本……………	7・13

(3) 巻四における『下紐』の標目および所引の異本

巻四では、物語から抜き書きされた『下紐』の標目と元康本との一致度と、元齋本との一致度とが拮抗しているが、原則として元康本から抜き書きされていると考える。そこで、元康本以外の本（狭衣物語）から抜き書きされたと考えられる標目（表記の差は無視）を表11（なお不祥の本は省略した）に示す。そして異本に触れる箇条を表12に示す。巻二・三で異本とした本を用いれば、これらの標目および解説を書くことができる。

△表11▽

	標目（元康本下紐）	標目に一致する本 *
1	まことや（78ウ）	雅（18ウ。前も）
2	三千大千世界（79オ）	齋（17オ。押・文も）
3	くしたる（80オ）	雅（32ウ。京も）
4	十体（84オ）	文（42オ。龍・前も）
5	おとゝ（84オ）	龍（55ウ。押・前・文も）
6	立かへり（88オ）	齋（126ウ。押・文も）

* 雅章本は書陵部四冊本の代わりに用いた。

〈表 12〉

	標目 (元康本下紐)	標目に一致する本	異本文	異本
1	十体 (84 オ)	文 (42 オ。龍・前も)	十斎	康 (78 オ。斎・押・前も)
2	「いまさらにえそ恋さらん」の略 (88 オ)	康 (156 オ。斎・龍・文も)	…えそしらさらん	押 (130 オ)

巻四の調査でも巻二・三で用いた本を使用していると言える。そして前田本をも異本の一本としていた可能性がある。

4 巻一の検討

(1) 元康本巻一に存在する異本注記

元齋本は巻一を欠くため、元康本の異本注記を検討することになるが、次の一例しかない。異本注記の示す本文を校本 (p280) で検索すると、押小路本と一致する。

かうそめににひ色のひとえ (康70オ) …………… *かうそめにほひ色のひとえ
ほイ

押小路本 …… ○かうそめにほひ色のひとへ

『下紐』巻一で異本について一〇箇所 (表15参照) ふれているので、巻一においても紹巴が校合を行ったことは確かであるが、元康本の巻一の異本注記は一箇所しかない。このことについては、親本から元康本への転記が一箇所し

か行われなかったか、巻一の時点では元斎本を底本にして校合して元康本への転記が一箇所しかなく、なされなかったかのいずれかであろう。

(2) 寛佐本

次に実践女子大学に所蔵されている寛佐本『狭衣物語』を取り上げる。この寛佐本は、巻二・三・四は元康本の親本を転写した本と推測される。しかし巻一は元康本との校異があり（本文掲出を省略）、しかも異本注記の本文が元康本に一致すると確実にいえる次の表13の五例が拾い出せる（ただし3・4では、紹巴の無関心な部分に小異が見られる）。

△表13▽

	寛 佐 本	元 康 本
1	さてもあれとはよもまかせ給はし（3オ） <small>もイにイ</small>	さてもあれともよにまかせたまはし（3オ）
2	大きおとゝの御かたにそいかにかやうの人おはせて（11ウ） <small>はイ</small>	おほきおとゝの御かたにはいかにかやうの人おはせて（11オ）
3	中将四五のさえはかりたにさふらはぬ物のねを（20オ） <small>侍らイ</small>	中将の四五のさえはかりたに侍らぬものゝ音を（19ウ）
4	はゝうせて後いとあはれにてなときえ給けるを（60ウ） <small>きイ</small>	はゝうせてのちはいとあはれにてなときゝ給けるを（58ウ）
5	我心のたゆゝしきそかし（99オ） <small>いイ</small>	わか心のたいゝしきそかし（96オ）

△表14▽

	標目 (元康本下紐)	寛 佐 本	元 康 本
1	さるはそのけふり (4オ)	さるはそのけふり (2ウ)	さるはこのけふり (2ウ)
2	軒のあやめを (7オ)	軒のあやめを (14オ)	軒のあやめ (13ウ)
3	家つかさ (12オ)	家つかさ (30ウ)	けいしきし (30オ)
4	うへも (13オ)	うへも (38ウ)	うちも (37オ)
5	ほり川といつとかや (18ウ)	ほり川といつとかや (51オ)	堀川といつとかや (49オ)
6	我心かねてや (19オ)	我心かねてや (51ウ)	わかこゝろかねて (50オ)
7	岩間の水の (22オ)	いはまの水の (59オ)	今はの水の (57オ)
8	久しう (24オ)	久しう (63ウ)	久しく (61ウ)
9	うせにし (25オ)	うせにし (66ウ)	うせ給にし (64ウ)
10	ゆへくしけにて (25ウ)	ゆへくしけにて (66ウ)	ゆへくしきけしきにて (64ウ)
11	そぞや先は不用也 (26ウ)	そゝやまはふようなり (70オ)	そゝやまろはふようなり (67ウ)
12	あなまかくし (32ウ) *	あなまかくし (84オ)	あなくまかまし (81ウ)
13	かの少将殿と (33オ)	かの少将とのと (84ウ)	かの少将とのみ (82オ)
14	そゝろかなる (35オ)	そゝろかなる (90オ)	そゝろなる (87ウ)
15	あたへて (36ウ)	あたへて (94ウ)	あまへて (92オ)

*標目の「あなまかくし」と一致する「や」のない本に蓮・吉がある。しかし標目は物語本文「あなまかくしや…」の傍線部を抜き書きしたものと判断した。

よって寛佐本の巻一は元康本の親本から出た本ではない。結論から先に述べると、寛佐本の巻一は元斎本の親本を転写した本と推測される。『下紐』が物語を抜き出す場合の標目は、巻二・三において元斎本よりも元康本との一致率が高く巻四において一致率が拮抗していることなどから、『下紐』が底本としたのは元康本と言えた。しかし巻一においては前掲の表14に上げた一五箇条において『下紐』の標目は元康本には一致せず、寛佐本の本文に一致している。このことから分かるように、標目は元康本よりも寛佐本と一致する率が高くなっている。

以上から判断しても、巻一における『下紐』の底本は元康本ではない。紹巴が巻二の時点では、『下紐』の底本を元康本と元斎本の二本のいずれを底本にするかを迷いながら校合していると述べたが、このことを考え合わせれば、元康本以外で底本になった本とは元斎本を措いてはない。元斎本の巻一は残念なことに欠けているが、寛佐本が元斎本の代わりをつとめてくれる面があるのである。

(3) 巻一における『下紐』所引の異本および標目

『下紐』巻一で異本にふれる箇条に次のものがある。巻一での底本であろう元斎本に代えて寛佐本を用いて調査すると、表15のようになる。

△表15▽

	標目 (元康本下紐)	標目本 *	異本文	異本文と一致する本 **
1	つらくなん… (11才)	押小路本 (p113)	〔異本あり如何〕	／
2	ほり川と… (18ウ)	寛佐本 (51才)	〔異本あり〕	／
3	まこと (28ウ)	寛佐本 (74ウ)	〔異本おほし〕	／
4	いと心つき… (29才)	寛佐本 (76才)	〔あやしくのみ見ゆるは〕ナシ	龍 (59才。文・鈴・京も)
5	行ゑなく (31ウ)	寛佐本 (82才)	***	書 (p315。押も)
6	の給ひちきる (33才)	寛佐本 (85才)	山なし	龍 (67才。書も)
7	おもへは (33ウ)	寛佐本 (86ウ)	〔異本あり〕	／
8	物車 (34ウ。「御車」と誤写)	寛佐本 (88ウ)	〔異本〕	／
9	つくしの (小式と) (37ウ)	文禄本 (p376。龍・京も)	つくしの豊後と	寛 (98才。康も)
10	いかにもめのとか (37ウ)	寛佐本 (98ウ)	〔異本多〕	／

* 寛佐本が該当する場合は、他本が同文であっても省略する。

** 異本として名の上がったもの、および寛佐本・元康本のうちから選んでいる。

*** 此世をはいつか見るへき浮しつみ跡なき水を尋とふとも

そして次に標目と一致する本が寛佐本ではないものを拾い出し表16に記す。

△表16▽

	標目 (元康本下紐)	寛 佐 本	標目に一致する本
14	有しあふき (39オ)	ありし御扇 (104オ)	書 (p396)
13	つくしの (小式と云人の) (37ウ)	つくしの (豊後といふ人の) (98オ)	文 (p376)
12	めのと又一人 (34ウ)	めのと又人ひとり (89オ)	為 (p342) *
11	ひるねしたりけるが (28オ)	ひるねしたる (72ウ)	龍 (56ウ。為も)
10	又ある本 (27ウ)	「又ある本」ナシ (71ウ)	書 (p276)
9	我たにもと (23ウ)	われたにと (62ウ)	相 (p241) *
8	源氏宮ふるき跡 (22オ)	源氏の宮はふるき跡 (58ウ)	秀 (p227) *
7	師にしたかへ (17ウ)	師にはしたかへ (48オ)	文 (p187)
6	われはかり (13オ)	かくはかり (36ウ)	京 (p140。秀も)
5	つらくなん… (11オ)	つらくなん… (28ウ)	康 (27ウ。龍・押・黒も)
4	いかに又 (11オ) **	いかにも又 (28オ)	平 (p112。内も) *
3	いなつまの (9ウ)	いなつま (22ウ)	文 (p86。前も)
2	紙のはたへ (7ウ)	かみの色はたへ (15オ)	書 (p61)
1	たゝん紙 (7オ)	たゝうかみ (14ウ)	不詳

* ** 標目と一致する本として平出本・内閣本を上げたが局部的校合による一致である。

*印を付したものは巻一で新たに名の上がつた本であり、巻二・三・四とは異本に幅がある調査結果となっている。本文から抜き書きされた標目が正確に記されているとすれば調査結果どおりだが、その保証はないのでなおよく考えたいが、巻一の調査後、調査対象の絞込みをする際に、平出本・内閣本・為秀本・為相本・為家本・前田本といった巻一において元康本・元齋本との異同が大きいものの中から選び出し、巻二以降での調査対象から外したものがあつた、ということとは十分考えられる。

紹巴は、まず元齋本（親本を指す場合が多かつたが、ここも親本の意。元康本も同じ）を底本にして『狭衣物語』の読み比べを始めたらしく、『下紐』巻一は元齋本を底本にしたと推測される。そして巻二の読み比べでは、巻一の経験から本数の絞込みを行ったようであり、残されたのは、元齋本・元康本・書陵部四冊本・文禄本・京大五冊本・龍谷甲本・押小路本・黒川十二冊本（多くはそれぞれの上位の本であろうが、その本そのものも含まれていると推理する）であり、これらの他に前田本や不祥の本もあつた可能性があつた。巻二では元康本を底本に読み比べを始めたが、途中何度も元齋本をも底本にしており、紹巴は巻二を読み比べる間は、元齋本・元康本の二本のいずれを底本とすべきか迷っていた形跡がある。紹巴はその迷いから抜け出し、『下紐』巻二・三・四では元康本を底本とした。ただし紹巴は『狭衣物語』の読み比べをととして本文校訂を目指していた形跡もあり、標目の抜き出し本文を底本以外の本から選んでいる場合がある。その最たるものは、『狭衣物語』の枠を越えて『源氏物語』から標目本文を選んでいることである。寛佐本は、元齋本巻一の親本と元康本巻二・三・四の親本を取り合わせた本を写したもの（昌叱本に該当すると推理する）から出た本であり、散逸している大阪天満宮蔵元齋本巻一の検討に資する本である。最後に大阪青山短期大学蔵元康本と同類の陽明本⁽¹²⁾が存在すること、および寛佐本と同類の龍谷乙本⁽¹³⁾が存在することを報告して稿

を閉じる。

注記

(1) 竹内理三氏「太宰府天満宮の古文書——特に中世以前——」(『菅原道真と太宰府天満宮 下巻』(吉川弘文館、昭50)所収)に、「天正十五年丁亥六月三日 当留守大鳥居 其時生年三十五歳 菅原朝臣信寛」とあり、天正二十年時には四十歳と知られる。

(2) 元康本を論じたものに、上野英子氏「紹巴所持本狭衣物語と『下紐』をめぐる考察——巻一を中心に——」(『論叢狭衣物語 1 本文と表現』(新典社、平12)所収)がある。

(3) 奥書から書写の進行を表のように巻一・二をそれぞれ四日間、巻三・四をそれぞれ五日間での書写と想定してみた。

巻	借り出し日	奥書日	書写期間
一卷	七日	十一日	四日間
二巻	十一日	十五日	四日間
三巻	十五日	二十日	五日間
四巻	二十日	二十五日	五日間

(4) 本稿では、この『下紐』を「元康本下紐」(略称「元康本」と称す。宮内庁書陵部蔵。四巻二冊。四巻の奥書に「此抄者元康御書写之已後一覽之次加奥書者也／慶長四年林鐘朔 紹巴(花押)／沙弥半醒者／予隱名也(印)」とある。川崎佐知子氏『『狭衣下紐』諸本考』(『中古文学』平7・5)で紹介されている。

(5) 注(2)所載の論文。

(6) 中野恵海氏「さごろもの本の研究」(「龍谷大学国文学論叢」昭23・7)に書誌と対校、藪波隆信氏「さごろもの本の対校」(「同」昭35・1、昭36・5)に対校が掲載されている。土岐武治氏『狭衣物語の研究』(風間書房、昭57)で論じられている。

(7) 寛佐本については注(4)所載の川崎氏の論文で紹介されている。また注(2)所載の上野氏の論文で取り上げられている。『物語史研究の方法と展望』(「実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ」(平11)には書誌(上野英子氏による)が掲載され、CD-ROMに影印が入っている。なお寛佐本のこの部分の「、イ」の印は異本注記を本文文化したものであり、付された箇所が異本の本文であることを示している。ただし異本注記を本文文化する際に「、イ」の印を付し、その箇所の本文が異本にないことを示していると考えざるを得ないものもある。これに対して紹巴の付した「、イ」の印は付された箇所の本文が異本にないことを示している。寛佐本には、これらが混在しているので、親本の本文・注記を考える際にはこの点に留意する必要がある。

(8) 注(7)所載の前掲書に書誌と翻刻(渡邊道子氏による)が掲載され、CD-ROMに影印が入っている。

(9) 注(4)所載の川崎氏の論文で紹介されている。

(10) 注(7)所載の前掲書に書誌が掲載され、CD-ROMに影印が入っている。

(11) 久下裕利氏「猪苗代家と『狭衣物語』」(『狭衣物語の人物と方法』新典社、平5に所収)で論じられている。

(12) 陽明文庫蔵。近衛信尹外題。四冊本。巻一および巻三の注記は元康本と一致するが、巻三に元康本にない注記もある。巻二は元康本に存在する注記を欠くものが多く、書写誤りもある。巻四の注記はおゝむね元康本と一致するが、元康本にない注記もある。なお陽明本を取り上げ論じたものに、拙稿「近世初期における『狭衣物語』享受——近衛尚嗣を中心にして——」(『論集源氏物語とその前後4』新典社、平5)がある。

(13) 巻四を欠く三冊本。注(6)所載の中野氏論文に書誌と対校、藪波氏論文に対校が掲載されている。巻二・三の注記は元康本の注記と一致するものが多い。巻一は寛佐本との共通性があるが、寛佐本に見られない注記も含んでおり、元斎本巻一の検討に資する本である。

〔テキスト略称（名称） 依拠資料一覧〕

☆狭衣物語（五十音順）

- 淡・淡川本（淡川家旧蔵本） 校本
- 押・押小路本（東京大学史料編纂所蔵押小路家旧蔵本） 校本および写真版
- 寛・寛佐本（実践女子大学図書館常盤松文庫蔵寛佐奥書本）「実践女子大学文芸資料研究所電子叢書1」CD-ROM
- 京・京大五冊本（京都大学文学部図書館蔵五冊本） 校本および写真版
- 黒・黒川十二冊本（実践女子大学図書館黒川文庫蔵十二冊本）「実践女子大学文芸資料研究所電子叢書1」CD-ROM
- 斎・元斎本（大阪天満宮御文庫蔵紹巴奥書木戸元斎本） 写真版
- 書・書陵部四冊本（宮内庁書陵部蔵四冊本） 校本
- 相・為相本（伝冷泉為相筆本） 校本
- 為・為家本（伝二条為家筆本） 校本
- 東・東大本（東京大学国文学研究室蔵本） 校本
- 版・版本（承応三年刊整版本） 平安朝物語板本叢書
- 秀・為秀本（静嘉堂文庫蔵伝冷泉為秀筆本） 校本
- 平・平出本（平出氏旧蔵本） 校本
- 文・文禄本（東海大学図書館桃園文庫蔵本） 校本および該書
- 前・前田本（前田氏紅梅文庫旧蔵本） 狭衣物語諸本集成
- 雅・雅章本（飛鳥井雅章筆本） 狭衣物語諸本集成
- 松・松浦本（天理図書館蔵松浦家旧蔵本） 校本
- 康・元康本（大阪青山短期大学蔵紹巴奥書毛利元康本） 写真版
- 陽明本（陽明文庫蔵本） 写真版
- 龍・龍谷甲本（龍谷大学図書館蔵甲本） 写真版
- 龍谷乙本（龍谷大学図書館蔵乙本） 該書

☆下紐

版本（承応三年刊整版本）平安朝物語板本叢書

元康本（宮内庁書陵部蔵紹巴奥書毛利元康本）写真版

貴重な図書の閲覧・紙焼などの頒布に御許可・御高配を賜りました宮内庁書陵部・東京大学史料編纂所・京都大学文学部図書館・実践女子大学文芸資料研究所・東海大学図書館・龍谷大学図書館・大阪青山短期大学図書館・陽明文庫・大阪天満宮御文庫（順不同）、御示教・御高配を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。